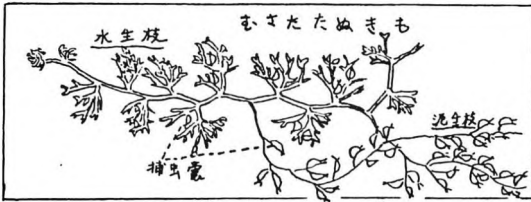


ムサタタヌキモに就いて

佐藤安司

前号にて既報のムサタタヌキモ (*Utr. yosezatoi* Makino) に就いてその後、志方欽二先生から記載図のコピーを頂いたのでここに御紹介したい。本種は昭和10年当時成東中学校教師であった与世里盛春氏が成東に於いて採集されたもので、牧野博士により新称“ムサタタヌキモ”を与えられ「千葉県博物研究」誌上に発表されたものである。発見者と与世氏は当時日下部勇氏の主宰された「愛花支会食虫植物研究会」のメンバーでもあり、その原図は全年8月発行の機関誌“Sun-Dew”第1巻5号に「千葉県下に発見せられた食虫植物」と題して転載された。ここにお目にかかる図は全“Sun-Dew”誌より志方氏が筆写されたものである。その種名「ムサタ」は本種の採集地名に由来するものと思われ、図から推測するに形態はヒメタヌキモに近似と思われるが泥生枝を生ずる点に於いて異なっている。現在ではその自生を見ることはできないが、参考迄に記録にとどめておきたいと考えた次第である。(1982.6.25)



“Sun-Dew” Vol. 1, No.5, p 1 「千葉県下に発見せられた食虫植物」中、ムサタタヌキモの図

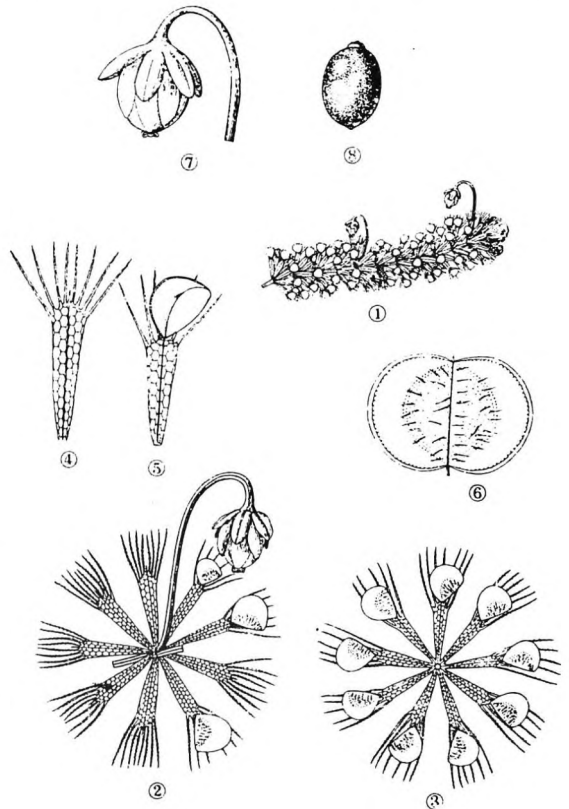
満洲水草図譜と食虫植物

佐藤安司

先日古書店にて久しく探していた「満洲水草図譜」を手にする機会を得た。昭和17年三省堂の発行、著者は佐藤潤平氏でその図は美しく描かれており大変興味深いものがある。全著中食虫植物は3種挙げられている。タヌキモ、コタヌキモ、ムジナモがそれで、同方面のタヌキモはよく結実すると書かれている。その種子の稜縁には歯牙を有しないが凹凸があり、この点に於いて欧州種 (*Utr. vulgaris*) と異なるものの一応欧州種と同一と見做している。邦産タヌキモは結実しない処から牧野博

士により *Utr. japonica* の名を与えられ独立種とされたが、現在では邦産種も欧州種と同一であるとする考えが一般的である。

さて全著中興味のあるのはムジナモの図である。寒冷地に生育するものだけにその成株はいささか貧相なもので、邦産種に記録されているような30節をこす長大な個体は望むべくもないが、開花はするようである。ムジナモは花梗下の輪生葉には捕虫器をつけない特長があり、その点本書の図は正しく、その性質をとらえているが、プランツェンライヒのモウセンゴケ科のモノグラフにディールスの描いた図は花梗下の輪生葉にも捕虫器を有しているように描かれており間違っている。同じ図はプランツェンファミリエンの新版にも転載されたが、ドルーデの著す旧版の方の図も拙いものながらよく見るとやはり同様の間違いをおかしているので、欧州種はよほど開花例が少ないものなのであろう。事実日照の関係で花茎は上がるものの満足以花弁が開かないらしく、ディールスの図のうち花器に就いては牧野博士の写生図がそのまま引用されている。



「満洲水草図譜」より